OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コレクティブハウジング居住を通じた親の社会化とその要件 : コレクティブハウス秋桜を事例として
Author(s)	稲見, 直子
Citation	年報人間科学. 2020, 41, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75371
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

コレクティブハウジング居住を通じた親の社会化とその要件
―コレクティブハウス秋桜を事例として―

稲見 直子

論文要旨

人は、社会においていかにして自己形成を図るのか。この点を把握する上で、社会学では社会化という概念が用いられ、家族がその担い手の一つとして重要な意味を持ってきた。しかし、従来の核家族を前提とする社会化研究では、親が他者から育児を通じて影響を受け、社会化される可能性が看過されてきた。本稿ではコレクティブハウジング（以下、「コレクティブ」と略称）を事例に、「親の社会化」という観点から、コレクティブ居住が親の意識や行動に与える影響、及びそれを可能とする要件について考察する。

本稿では「コレクティブハウス秋桜（以下、「秋桜」と略称）」を取り上げ、秋桜での観察と夫婦3組のインタビュー・データに基づき分析を行った。

その結果、秋桜における「親の社会化」として、(1) 育児・母親規範からの解放、(2) 育児の仕方の相対化と相互参照、(3) 親の不完全さの受容、(4) 親役割の問い直し、の4点を確認した。さらに、秋桜での「親の社会化」は、居住者間の近接性を高める空間的特徴と、自主運営を基に築かれてきた自省性と平等性と協同性と信頼性に基づく居住者間の肯定的な社会関係的特徴とが、相互補完的に支え合うことで可能になることを明らかにした。

コレクティブは、異質な価値や生活様式を持つ他者同士が、相互にその差異を認識し尊重した上で互いに共存できる方法を模索していく暮らし方という点で、現代的な共存のあり方としても意義がある。

キーワード

社会化、親、コレクティブハウジング、自主運営、共用空間

1．「親の社会化」とコレクティブハウジング

人は、社会においていかにして自己形成を図るのか。この点を把握する上で、社会学では社会化という概念が用いられ、その担い手として重要な意味を持ってきたとされる1つが家族である。その代表的論者であるT. パーソンズは、「常識的なレベルからみても、明らかなことだが、家族のもっとも重要な機能は子どもの社会化に寄与するという点である」と述べる（Parsons and Bales 1956=2006: 1-2）。このパーソンズの子どもの社会化論は、日本の家族の社会化研究においても大きな影響力を持ってきた（佐藤 1976: 20）。

ただし、ここでパーソンズが依拠した家族は、「現代アメリカの家族」（Parsons and Bales 1956=2006:

63)、すなわち核家族である。パーソンズは、「核家族の家族員は両親とそれに依存する子どもから成立」し、「彼らはふつう分離独立した住居を持っている」（Parsons and Bales 1956=2006: 26）と特徴付ける。日本の家族の社会化研究もこれに準拠する形で、核家族を前提とした子どもの社会化研究が蓄積されてきた（佐藤 1970、松原 1981）。

ここから、家族における従来の社会化研究は一定の偏りを有してきたことが見えてくる。1つは、社会化される対象が子どもに限定されてきた点である。核家族では成人が親のみとなるため、親は子どもの見本として扱われてきた。工藤保則も、従来の社会化研究では「親は社会化のエージェントとしてのみ言及され、親から子への一方通行的な影響が説明されることが多かった」（工藤 2016: 12）と指摘する。つまり、親は社会化される対象としてみなされてこなかったのである。もう1つは、核家族が住む「分離独立した住居」では、家族成員以外の人間、すなわち近隣などの外部との境界が明確になるため、社会化のエージェントとして他者の存在が想定されにくかった点が挙げられる。つまり、社会化する対象もまた家族内部の成員に限定されてきたのである。このように、核家族における従来の社会化研究では、子どもの社会化に焦点が当てられ、その担い手である親が子や他者から育児を通じて影響を受け、社会化される可能性が看過されてきたと言える。

では、なぜ親を対象とした社会化を考える必要があるのか。子どもの社会化研究に先鞭を付けたパーソンズ自身、「社会化は成人地位の獲得によって終わらない」（Parsons 1951=1974: 243）と、社会化は生涯にわたる可能性を指摘する。このことは親も例外ではないだろう。つまり、親もまた他者との関わりの中で親役割を取得していく存在と言える。しかし現実には性別役割分業体制のもと、父親は仕事、母親は育児に専念することで両者とも職場ないしは家族以外の他者と関わる機会が奪われてきた。特に母親の場合、専業主婦ほど社会的つながりが乏しく育児不安[1)]に陥る傾向があり、育児不安を軽減する上で多様な人々との関わり合いが重要であることが指摘されている（中谷 2008）。つまり、親の社会化を考えることは、育児において他者との関わりの有効性を示すと同時に、それを通じて親自身もそのあり方を変化させる存在であることを示すという意味で、本稿は一定の意義を有すると考える。

では、従来の社会化研究が前提とした核家族を乗り越えるための恰好の事例とは何か。それは、核家族関係の根幹にある血縁や婚姻に限らない形で他者と共住し、その関係性のもとで社会化が可能となる事例であろう。これにはシェア居住やグループリビングが挙げられるが、本稿ではその1つである「コレクティブハウジング（以下、「コレクティブ」と略称）」を取り上げる。なぜコレクティブか。コレクティブとは、個別の住戸とは別に共用空間を併せ持つ集合住宅で、共用空間を中心とする住宅の運営内容・方法を居住者間の話し合いを基に意思決定し、食事作りなど生活の一部を協同化する暮らし方のことである。コレクティブは、単身者を中心とするシェア居住やグループリビングとは異なり、家族の入居も可能である。実際、コレクティブの入居家族の中で多数を占めるのが、子育て期の家族である。さらにコレクティブは、居住者間で居住空間や生活の一部を協同で運営・維持しているため、居住者間の相互作用が起こりやすいという特徴がある。つまり、コレクティブという居住空間では家族成員以外の他者を社会化のエージェントとして組み込めるだけでなく、他者との相互作用が日常的にある環境の中で育児をすることで、親も社

会化される対象として考察することが可能になると考えられる。

コレクティブに関しては、国内外で既に一定の研究成果が蓄積されている（Vestbro 1992、小谷部2004）。その中で、子育て期の家族に関する先行研究では、主に育児環境としての意義が示されてきた。典型的には、子どもについては他の居住者との関わりを通じて対人関係力が育まれるなど発達や成長過程における意義が強調されているのに対し、親については家事・育児の経済的時間的な効率性・合理性に関して議論される傾向がある（櫻井ほか 2012）。

しかし、コレクティブ居住が子どもの意識や行動形成に何らかの影響を及ぼすとすれば、親にも同様の影響が考えられる。本稿はこうした観点を「親の社会化」と位置づけ、コレクティブ居住が親の意識や行動にどのような影響を及ぼすのか、そしてそれがどのような要件によって可能になっているのかを考察する。これにより、社会学における家族の社会化研究のみならず、コレクティブ研究にも新たな視点を提示する。それはまた、絶え間ない他者との相互作用に基づく現代的な共存の可能性を示す事例としても意義を持つものである。

2．調査概要

本稿で取り上げるコレクティブは、東京都郊外にある「コレクティブハウス秋桜（以下、「秋桜」と略称）」である[2)]。秋桜は、関東を中心にコレクティブ事業を展開する「NPO法人コレクティブハウジング社（以下、当NPOの略称に従って「CHC」と略称）[3)]と事業主との共同事業によって建てられた。

秋桜の建物は個別の住戸群と複数の共用空間で構成される。住戸はすべて賃貸で、住戸タイプは2人用のシェア住戸から、1ルーム、1LDK、2LDKまで設計上多様な世帯の居住が想定されている。各住戸には台所と浴室とトイレが完備され[4)]、1つの独立した住戸である。共用空間にはコモンスペース（以下、「コモン」と略称）のほか、和室やウッドデッキや菜園などがある。

2019年9月1日現在、秋桜には33名が暮らしている。年齢は2歳から70歳代までと多世代にわたる。世帯数は全部で18世帯、うち核家族世帯が5世帯、夫婦世帯が1世帯、単身世帯が12世帯（うち65歳以上の世帯が4世帯）と世帯規模・構成にも幅がある。秋桜は子育て家族が多い住宅としてCHCに紹介して頂いたため、調査対象として選択した。

分析に用いるデータは次の2つである。1つは、秋桜での各種活動を観察したデータである。観察では活動の様子や居住者間のやりとりに着目しフィールドノーツとしてまとめた。観察期間は2016年1月～2017年3月、2018月3月～2019年9月までである。もう1つは、秋桜に居住する3組の夫婦を対象に行った半構造化インタビューのデータである（夫と妻それぞれ個別に実施したため合計6名分）。調査期間は2016年1月～2019年5月までで、1名は4回、2名は3回、3名は2回実施した。

表1は3家族のプロフィールである。3家族の共通点としては、(1) 夫婦とも30歳代～40歳代、(2) 高校生以下の子どもがいる、(3) 夫婦共働き（常勤）、(4) 設立初期から入居し居住歴が長い、といった点が挙げられる。また (5) 3組中2組の夫婦が両方ないしは一方が関東以外の出身のため、親族から育児援

助が得にくいという特徴もある。尚、対象者の表記について、○fは父親（father）、○mは母親（mother）、○cは子ども（child）を意味し、各家族の子どもにきょうだいがいる場合はアルファベットの横に年齢順に番号を付した。次節以降の議論でもこの表記を用いる。フィールドノーツからの引用は（年/月/日）と表記する。

表 1　調査対象者のプロフィール（2019 年 9 月 1 日現在）

対象者	年齢	子ども（年齢）	就労状況（雇用形態）	入居期間	出身
Af	40 代	Ac（13）	共働き（常勤）	5 年以上	関東
Am	40 代				関東以外
Bf	40 代	Bc1（16）、Bc2（9）、Bc3（7）	共働き（常勤）	5 年以上	関東以外
Bm	40 代				関東以外
Cf	40 代	Cc1（7）、Cc2（4）、Cc3（2）	共働き（常勤）	5 年以上	関東
Cm	30 代				関東

3．秋桜における「親の社会化」

「社会化」の定義は多義的で、論者によってその強調点も異なる。そこで本稿では『新社会学事典』で示される基本的な定義を用いる。そこでは「個人が他者との相互作用のなかで、彼が生活する社会、あるいは将来生活しようとする社会に、適切に参加することが可能となるような価値や知識や技術や行動などを習得する過程」（森岡ほか編 1993: 596）とされる。つまり、ここでの「社会」とは、秋桜というミクロ社会のことを意味し、親たちが秋桜での生活において他者とどのように相互作用を行い、それを通じて秋桜入居以前にマクロ社会で身に付けた親に関する価値や態度をどのように変化させていったのかを見ていく。

3.1 育児・母親規範からの解放

まず、親同士の関わり合いとして挙げられるのが育児援助である。山根真理らによれば、育児援助は「困った時に子どもの世話を代替してくれる実体的援助」、「子育てのやり方について助言を与えてくれる情報的援助」、「子育ての愚痴を聞いてくれたり、育児の大変さを理解してくれる情緒的援助」の3つに分けられる（山根ほか 1990: 116）。本調査でも情報的援助や情緒的援助の存在が確認できたが、中でも調査対象者全員が秋桜の利点として挙げたのは実体的援助の存在である。例えばBmさんは次のように述べる

> やっぱり、子どもを預ける預かるは、ほんとにありがたくて、（中略）〔仕事で〕夜帰りが遅い、迎えに行ってもらって、そのまま一緒にご飯を食べて、お風呂入って、なんなら寝かしつけまでしてもらうっていうのは、やっぱここでしかありえないなと。（〔〕内は筆者補足。以下同様。）

表1で示した通り、3家族はいずれも夫婦共働きである。彼ら・彼女らは仕事と育児に日々追われる中、インフォーマルな形で預かり合いを行ってきた。特にBf・Bmさん夫婦の場合、遠方に暮らす親族からのサポートがほとんど期待できないため、秋桜での日常的な預かり合いは2人が仕事を継続する上で重要な役割を果たしてきた。他にも、東日本大震災発生当日、帰宅困難に陥ってしまったAf・Amさん夫婦の場合、他の居住者がすぐにAcくんを保育園まで迎えに行き翌日まで預かってくれたおかげで緊急時もなんとか乗り切ることができた。こうした預かり合いが可能かつ容易となる要因について、Afさんは次のように話す。

> 日常の暮らしの中でも重なり合う部分も多いから、気楽な部分もすごく多くて。例えば、何々がないと言っても、家の鍵空いていれば、もう自分でとってきてって。（中略）あとはまあ、着るものとかは借りても貸してもそんなにわざわざ返しにいかなくてもいいじゃないですか。借りて洗濯して、ひょっとドアにかけといてもいいし、次に出会うときにひょっと渡してもいいし。だけど、家が別々だとそういうわけにもいかないですよね。お泊りにいくといったら、もうあれもこれも、全部、パジャマも歯ブラシもなんとかもきちっと全部もれがないようにそろえて、（中略）何か借りたらそのまま帰ってきて、洗濯したものをいつのタイミングで返さなければいけないとかあるじゃないですか。

秋桜の各住戸は近接性が高いうえ、共用の廊下や階段が屋内にあるため、天候や時間帯を気にせず、住宅内を安全に移動できる。必要な衣類が足りない時、預かる側が「自分でとってきて」と言えるのはそのためである。一方、預ける側としても、借りた衣類を返却する際に「ひょっとドアにかけといて」よいため、「わざわざ返しに行く」という煩わしさが軽減される。しかも、秋桜ではコモンの掃除など協同作業が定期的に行われるため、日常生活の中で居住者たちが会う機会が担保されている。つまり、「家が別々」の場合と比べ、「タイミング」を合わせなくても「次に出会うときにひょっと渡してもいい」のである。預かり合いについて「気持ちも実際もすごく楽」とAfさんが語る背景には、上述したコレクティブ独自の設計とそれに基づく居住者の暮らし方が関連していると考えられる。

ここで重要なのは、こうした育児援助を経験する中で、親たちの中にはそれまで抱いていた育児や母親に関する規範から距離を置く人が現れたことである。例えば、前述のBmさんは育児に関して「あんまり自分で抱え込まなく」なり、人によく「頼る」ようになったと話す。「自分でやらなきゃとか、人に頼るなんてとかっていうのが多い中で言うと、なんかすごいそこは楽そうにみえる」と友人からも言われたという。同様の語りはAmさんからも聞かれた。

> 東京に来てからは、やっぱりこう家族でとか、身内で付き合ってやってかなきゃいけないなあって思ってたんですけど、ここに来たら、別に家族とか身内だけじゃなくって、全然血のつながりはないんだけど、ご近所さんとの暮らしでみたいなことで助け合えることっていっぱいあって。それができるとすごく自分がすっごいがんばらなくても助けてもらえる時にはそれでちょっと安心、助かる、みたいなこと結構あるんですよ。

彼女たちの語りから共通してうかがえることは、2人とも秋桜に入居する以前は、育児を家族などの血縁関係で担わなければいけないと考えていたことである。Bmさんは秋桜入居前、家族3人（夫婦とBc1）と単身者数名とで都心部でシェア居住をしていたが、シェアメイトは「みんな忙し」かったため、助けが必要な時は「あちこち電話かけまくって、なんなら実家の母にわざわざ大阪から来てもらうとか、謝ってばかり」だったと話す。Amさんの場合、子どもが誕生してから秋桜に入居するまで専業主婦だったため、家事育児はすべて彼女が引き受けていた。日本社会では高度経済成長期以降、育児は家族が担うものとして私事化され、とりわけ母親がその責任を負うことが期待されてきた（落合 2004: 30）。今回の調査を通じても、母親がそうした規範を少なからず内面化していたことがわかる。だが、Bmさんの「自分で抱え込まなく〔なった〕」や、Amさんの「自分がすっごいがんばらなくても助けてもらえる」といった発言から、彼女たちがそれまでの育児・母親規範から解放されたことが窺える。

3.2 育児の仕方の相対化と相互参照

育児援助以外にも、秋桜では日常的に居住者同士が関わりを持ちながら暮らしている。居住者間の相互作用と社会関係を支える上で重要な役割を果たしている物理的要因が共用空間である。特に、1階のコモンは居住者が日常的に利用する空間である。広さが72㎡もあるコモンは、「1人でいても大勢でいても心地の良い空間」をイメージして設計され[5)]、少人数でもくつろげるソファやカフェコーナーのほか、30名程度が一堂に会せる大型キッチンやダイニングも設置されている。

日常空間としてのコモンでは、「他の人の子育てがほんとに間近に見られる」とAfさんは話す。その機会の1つとなるのが「コモンミール」である。コモンミールとは当番制の夕食作りのことで、2〜3名が1組となって献立から買い出し、調理、後片付けまでを担当する。当番は献立や調理で中心的な役割を担う「メイン」と、メインをサポートする「サブ」からなる。メインは月1回担当することが望ましいとされ、当番以外の居住者は事前に必要な食事数を注文しておけば、出来上がった夕食を食べるだけでよい。大人1食400円で子どもは半額である。秋桜のコモンミールは週2〜4回、1ヶ月で14〜17回実施される。食事は自室に持ち帰って食べることも可能だが、大半の人はコモンで食事をとる。その人数は10名から30名程度である。

コモンミールは日々の夕食作りの負担を軽減できるため子育て家族の間で好評で、家族揃って食べに来ることが多い。コモンミールの準備段階から食事が終わるまでの間は、Afさんが言うように、日常の他の家族の育児の仕方がよく見える。以下は、ある日のコモンミールの風景である。

この日は、Bc2くんとBc3くんがメインを担当、Bfさんはサブとして子どもたちを手伝う。メニューは、たらこパスタ、コーンポタージュ、キャベツと塩昆布のサラダ、グレープゼリー、頂き物のメロンである。この日はここ数ヶ月間で最多の32名が食事を注文していた。

17時から調理が始まる。子どもたちはコーンポタージュの下準備として、10本のとうもろこしを順次ラップにくるみ電子レンジで温めていく。トウモロコシを取り出す時、Bc3くんが「熱っ」と言うと、Bfさんは「熱いからこれ使い」と鍋つかみの手袋をそっと渡す。

途中、Acくんがコモンにやって来てソファになだれ込むようにして横になる。5分後、Amさんがコモンに入ってくると「塾に遅れてるわよ！」と、塾に遅刻しているAcくんを厳しく叱る。

しばらくすると、今度はCfさんの子ども3人が一斉にはしゃぎながらコモンに走って入ってくる。3人はカフェコーナーで、Bc2くんBc3くんから借りた妖怪ウォッチの時計で遊び始める。途中、Bc2くんBc3くんもそのおもちゃに気を取られ、幾度となくキッチンを離れ3人と一緒に遊び始める。その間も黙々と調理を続けるBfさんは「〔メインとして〕もっと自覚をもってよー」と子どもたちに静かに呼びかける。

19時過ぎに食事が完成する。居住者は続々とコモンに入ってきて食事を取り席につく。Cf・Cmさん家族もやって来て、Cc2くんがお皿に盛っていたパスタを運ぶ途中、パスタを全て床に落とす。CfさんとCmさんが「もー！」と言うとCc2くんが大声で泣き出す。Cmさんはパスタが残っていないかBfさんに聞きに行く。その間、Cfさんは険しい顔をしながら「気をつけないとダメじゃない。せっかく作ってくれたんだから。」とCc2くんの背中をさすりながら注意する。そこへBc3くんが「はいよー！」と言って新しくお皿に盛ったパスタを走って持ってくる。CmさんもCc2くんに駆け寄り「ごめん、ごめん！」と言いながら抱き上げる。Cfさんは床に落ちたパスタを黙々と掃除する（2019/7/20）。

これら一連の出来事の中で、親同士が直接コミュニケーションを交わすわけではない。しかしこうした日常の光景は、親たちが自身の育児の仕方を相対化する契機になっている。Bfさんはこの日だけでなく、普段からよくコモンのキッチンを使って子どもたちと一緒に食事や菓子を作っている。Afさんはそうしたの姿を見て「やらなきゃなあというモチベーション」と同時に「自分はそこまでできていないと省みる機会」になると話す。

この他にも、親たちの間で育児の参考例になるのが「子どもの叱り方」である。例えば上記観察において子どもに対して厳しい態度で臨んでいたAmさんは、子どもに鷹揚に接する他の親を見るうちに「どうやら、うちはうるさいらしい」と気づき、「それぐらいおおらかになれたら、ちょっとこんなに怒らなくってもいいかな」と自身の育児を省みるようになったという。Cfさんもまた「子どもの叱り方とかにしても、家庭によって全然違うのを目の当たりにして、正解はないと思うんですけど、（中略）他のうちを見て、うちはやっぱこういう感じかなあ」と、様々な育児を見ることで育児に正解がないことを認識すると同時に、他の親の叱り方と比較して自身の叱り方を見つめ直す様子がうかがえる。このように、親たちはコモンを介して日常的に互いの育児に触れる中で、自身の育児の仕方を相対化すると同時に、他者の育児を参照し育児に対して柔軟な姿勢・態度で臨むようになる様子が見て取れる。

3.3 親の不完全さの受容

子どもたちとの関わりを通じて親の認識を変えた人もいる。Cf・Cmさん家族は2人目の子どもが誕生した当時、1ルームの部屋に4人で暮らしていた。そのため、部屋が狭くそこで「完結させようとすると息が詰まって」しまうため、Cmさんは「寝る時とかに〔住戸に〕帰る」というぐらい、コモンを「〔住戸の〕完璧なる延長」として子どもたちと過ごし、夕飯もできるだけコモンでとるようにしていた。ちょうどその頃、Cc1ちゃんは自我が芽生えてくるイヤイヤ期のため、夜になると癇癪を起こすことが増えていった。

しかし、夫のCfさんは夜勤で家にいない日が多かったため、育休中のCmさんが1人でCc1ちゃんの対応をしなければならなかった。そんな時に助けてくれたのが同じ秋桜に暮らす子どもたちだった。

> いくら私が言ってももう、全然〔Cc1 ちゃんの癇癪が〕止まらなかった時に、小学生の女の子が〔Cc1 ちゃんに〕「一緒に行こう」とか言って、「遊ぼ」とか言って、やってくれて、〔1 つ〕下の〔歳の〕女の子がちょっと来たら一気におさまってとか、そういう経験が何回もあって。そういうのもあって、自分だけができるとか、自分しかこうできないっていう思いは捨てて、できない、どうにもならないって時は、周りに、それが子どもだろうが何だろうが、助けを求めるとか、すごいそれが助かったんですよ。

Cmさん家族以外にも、コモンで夕食をとる家族が複数いた。食後、Cc1ちゃんが風呂に入るのを嫌がり始めると、子どもたちが「じゃあ、私と入ろう」と言って手を差し伸べてくれた。普段から子どもたちはよく一緒に遊んでいたため、「もともといい関わり」ができていたとCmさんは語る。こうして、Cmさんは秋桜の子どもたちから何度も助けられる経験を通じて、親だけが子どもをコントロールできるといった感覚を放棄し、親そのものの捉え方を変化させていったことが窺える。

この他にも、コモンでは子どもと大人とが家族の枠を越えて多様に関わり合う場面がよく見られた。具体的には、イベント後にボードゲームで遊ぶ姿(2016/12/17)、コモンミールを一緒に食べる様子(2018/3/10)、一緒に勉強をする様子（2019/8/24）などである。時には各自の得意分野を活かして菓子作りやビーズ作りを教えてくれることもある（Cmさん)。Cmさんは、こうした育児に様々な他者が関わる環境について次のように話す。

> いろんな大人がみてくれたほうがいいなぁって最近すごく思って。やっぱり大人が親だけだと、考え方が 1 個とか 2 個だけじゃないですか。いろんな人がいればいろんな刺激を受けられるし、親って別に親が全部正しいわけではないし、間違ってるかもしれないし、〔子どもが〕理解しきれないところを、〔他の居住者が〕フォローしてくれたり、足してくれたりするのがまぁいいかなとか思って、そういうのが。でもそういうのもこういうところにいるから気づける、たぶん、かもしれないですね。

Cmさんの語りから、育児を他の居住者と相互に補完し合う重要性を認識していることがわかる。それは単に情緒的・情報的・技術的な援助にとどまらない。親としての考え方や振る舞い方が自己完結せずに他者を必要とする意味で、不完全であることを肯定的に受容していったことを意味している。

3.4 親役割の問い直し

ここで取り上げるのは、親の役割そのものを問い直す社会化の例である。これには自主運営と呼ばれる、コレクティブの住宅運営の方法が深く関わっている。自主運営とは、入居者が居住者組合[6)]を設立し、共

用空間をはじめとする住宅の運営内容や方法を、同組合の話し合いを基に決め、活動自体も組合で担っていくことをいう。自主運営を行うにあたっては、入居希望者は入居前からワークショップ（以下、「WS」と略称）に参加し、集団形成を図ることが求められる。

以下では、秋桜のプロジェクトが立ち上がった当初から入居希望者として関わり、現在も居住するAfさんを取り上げる。Afさんの意識や態度が変化を遂げる様子は長期に渡るため、プロジェクト初動期からその過程を追う。

秋桜の入居前のWSは、建物の工事と並行して月2回（1回につき約3時間）のペースで約2年間、公民館で行われた。詳細は後述するが、コレクティブのWSはCHCのファシリテーションのもと進められ、住宅設計や入居後の自主運営の内容について参加者間で意見を出し合いながら決めていく場である。

WSへの参加は、Afさんの親としての姿勢に変化をもたらした。まずWS初期には1日の過ごし方や現在の暮らし方など、実際の暮らしを他の参加者と1つずつ丁寧に考え、それらを相互にやりとりする場が設けられる。その過程で、Afさんは暮らしを「日常の些事というか、雑事というか、そういうことの積み重ね」と捉えるようになった。結婚当初、Afさんは妻と都心部の賃貸マンションに暮らし、夫婦で同じ会社で働いていたため、平日はデパートで総菜を買って帰ったり、外食して帰ることが多かった。休日も「食事を一生懸命作るとかそういう暮らしを楽しむ感じではなかった」。子どもの誕生後は妻が専業主婦となったため、「食事なんかも全部準備してくれるし、だからやってることと言えば、かみさんが作ってくれたご飯食べて、仕事行って帰ってきて、子ども風呂入れて、ご飯食べて、寝て」と、いわゆる性別役割分業型の生活を送っていた。しかし、AfさんはWSを経験するうちに「暮らしって無いな、俺」と感じるようになる。それが「僕にとってはすごく大きな出来事で、大きな発見」だったと話す。つまり、CHCや参加者からの暮らしをめぐる問いかけに応答する形での自己の問い直しが、Afさんの変化の起点となったのである。

続くWS中期から後期にかけて、入居の意思が固まった参加者たちで居住者組合準備会を設立し、入居後の自主運営の内容や方法を決めていく。具体的には、コモンの備品やインテリアの検討、コモンの掃除内容と当番表の作成、建物周りの植栽計画、菜園での野菜作り計画、コモンミールの運営方法の検討、イベント企画など多岐に渡った（NPO法人コレクティブハウジング社 2008a）。Afさんは入居後の自主運営の方法について参加者同士で話し合ううちに、自身の子どもにも料理や掃除や菜園に自ら関わる大人に育ってほしいと期待するようになる。「〔料理や掃除を〕当たり前と思う環境で育ったら（中略）それが当たり前なんだという風に思って」するようになると考えた。

しかしある時、子どもに期待する自身の親としての立場に疑問を抱くようになる。

> ちょっと無責任な話になるんですけど、（中略）俺に暮らしないなって思っているくせに、子どもはそうじゃなくて自分で家事もできる人に育ったらいいなとか思ってるんですよ。（中略）で、WSが進んでくると、ある時、あれ、子どもがそういう人になったらいいと思っているということは、そういう大人が好ましいと思っているということじゃないですか。（中略）パパは違うんだよ、だけど

あなたがそういう風に育つように子どもの頃からそういう環境が良いと思ってさ、みたいな話って、おかしな話かなと思って。

当初は「子どものことを思って」秋桜への入居を考えていたAfさんだったが、やがて自分のことを棚に上げ、子どもに過度に期待する自らの親としての「無責任」さに気づき反省するようになる。そしてAfさんは、「こういう大人像が望ましいと思っている」のであれば「自分もそれに近づ」き、「暮らしとか、雑事、些事みたいなことをちゃんとやる」大人になろうという風に「思考の変遷」が起きていったと話す。すなわち、秋桜での集団形成が進展したこの段階で、育児に伴うAfさんの自己形成も子どもに対する期待を自らにも反映させる形で進化したことが示されたのである。

秋桜入居後、Afさんは自らを「コレクティブ原理主義者」と名乗るほど、コレクティブの自主運営に積極的に関わるようになった。秋桜では、庭の草むしりから木の剪定、畑の水やり、コモンの掃除、コモンミールの準備、定期的な「話し合い」など様々な当番や役割が「好むと好まざるにかかわらず」「自分の事として起こってくる」。Afさんはこれらのことを「誰かが勝手に自動的にやってくれる」のではなく、「自分も〔自主運営を〕動かす1人としてちゃんと責任感を持って参加し」「自分も意見を述べて、他の人の意見も聞いて、一緒に何かを動かしていく」ことが大事だと考えるようになったと語る。

以上はAfさんのケースであるため、すべての人に同様のことがあてはまるわけではない。だがAfさんのように、子どもに行動規則や常識を教える養育期にある親にとって、コレクティブのWSや自主運営には、親としての自身の価値観や前提それ自体を問い直す契機が潜在的に内包されていることが推察できる。

4．秋桜における社会関係的特徴と空間的特徴
―「親の社会化」の要件として―

では、これまで見てきた親たちの変化はなぜ可能になったのか。その要件とは何か。秋桜は一定の建造物での集団による自主運営を基に成り立っている。そこで以下では、秋桜の特徴を社会関係的側面と空間的側面とに分けて考える。

秋桜の骨格をなす自主運営は、入居前のWSから入居後のWSと定例会へと続く「話し合い」を基に行われる。先に見た通り、入居前のWSは参加者間で住宅設計や運営方法などを話し合い、自主運営のための共通の土台を築いていく場であるが、その過程において、参加者は自身のこれまでの生活を振り返る機会が随所に設けられている。例えば「私の暮らし・1日の流れ」、「コレクティブハウスに住んで、今の自分の何が変わってほしいか」、「私の食生活の夢と現実」として実際の食生活（誰が何を作り、どこで食べるかなど）を振り返るなどである（NPOコレクティブハウジング社 2007b、2008b）。ここには、各自の身近な話から始めることで、設計や自主運営についてよく知らない参加者でも発言が容易になるというCHCのねらいがある。さらに参加者は、テーマごとに自身の振り返りを発言し合い、他者の意見を聞くことが自己を振り返る契機にもなる。これは「他の人の意見を通していろいろな気づきがあり楽しかった」、

「皆さんそれぞれの考え方が分かり発見もあります。もっとそのような角度からも考えてみようと思った」(NPOコレクティブハウジング社 2007a、2008a）といったWS参加者の感想からもうかがえる。こうした自省性に基づいた意見が、秋桜の設計や入居後の運営方法にも反映されていく。

WSは入居後も行われる。秋桜では年2回、1回あたり2〜3時間かけて実施され、子どもを除く居住者全員参加が原則である。WSではその時々に住宅で問題になっている事柄を取り上げ、居住者間で意見が交わされる。これまで扱ったテーマは「快適なコミュニケーション」、「共用空間の快適さ」、「地域とのつながり」など多岐に渡るが、その中には「子どものいる暮らし」と題して、子どもとの暮らしで感じていることや気になることを発言し合う場もたびたびもたれた。ただしこれらいずれのテーマにおいても、その根底にあるのは入居前のWS同様、自らの暮らしの振り返りや問い直しである。AfさんはWSについて「問いかけなければ、特に深く考えることもなくさらっといっちゃうようなこと」をあえて「自分の中で掘り下げ（中略）意識化する」場だと語る。

こうした「話し合い」の仕方は、入居後の定例会でも継続される。秋桜の定例会は月1回土曜日に3〜4時間かけて行われ、子どもを除く居住者全員の参加が原則である。定例会は役員が事前に作成した議事次第に沿って進められ、共住していく上で必要なルール作りや自主運営上の課題などを話し合う。WSとは異なり、定例会は何らかの意思決定がなされる場であるが、その際、集団レベルでの振り返りが制度的に行われる。典型的には、過去の定例会で決まったルールや運営方法はあくまでも暫定的なものとされ、しばらく期間をおいてからそれらが適当であったかを改めて検討する場が定期的に設けられる。こうして集団レベルでの自省性に基づいて、秋桜では自主運営のための集団形成が図られる。

このように、WSと定例会では個人レベルと集団レベルにおいて自省性に基づく「話し合い」が頻繁に図られる。つまり、この過程を通じ居住者の中で自己省察的な思考様式が培われていくと考えられる。

また「話し合い」では、全員が対等な立場で発言する場が確保されている。例えば、WSでは居住者1人1人が順番に意見を述べていく点である。また、定例会では原則多数決を用いず、全員が納得できるまで熟議を重ねる。その手段として、秋桜の定例会では「色カード」が利用されている。初期には、最終的な合意形成は挙手によって賛否を確認していたが、挙手だけではそれが消極的賛成なのか積極的賛成なのか真意がわからず、互いに「モヤモヤ」（Amさん）していた時期があった。そこで秋桜ではCHCに教えてもらった色カードのアイデアを導入し、緑色は「賛成」、水色は「賛成だけど不安」、赤色は「反対」、灰色は「質問があります」など、合意形成時には各自が色カードを挙げ、細かいところまで意見を汲み取り、合意内容に反映させていくことで対等な関係性の維持に努めている。

この対等な関係性の維持は、自主運営の役割や当番の仕方にも見て取れる。秋桜の居住者組合は、実務面を担う役員・運営委員と日常生活を支える活動グループからなる[7)]。これらの主な仕事は、当番や役割をどう分担するかを考えることで、作業自体は居住者全員が分担して担う。例えば菜園を担当するグループの場合、菜園に必要な種や備品の購入は行うが、実際の種まきや水やり、草ひきや収穫は居住者全員に割り振られる。その際、役割や当番は世帯単位ではなく、個人単位で担う点も特徴である。こうした平等性に基づく役割分担を通じて、自主運営を維持していくための協同性が育まれる。

以上のような秋桜の自主運営の特徴は、自省性と平等性と協同性に根差すものと整理できる。ただしここで留意しておきたいのは、この平等性には常に自省性が働いていることである。つまり、役割や当番は居住者に対等に割り振られるものの、居住者の年齢や仕事の状況などに応じて、各自の役割や当番の内容・頻度は「話し合い」を通じて適宜見直される。

この自主運営の自省性と平等性と協同性を築く上で、事業主体であるCHCが果たす役割は大きい。秋桜での「話し合い」はあくまで参加者・居住者主導を基本とする。だが、CHCのスタッフは長年WSに基づいた都市計画や建築に携わってきた専門家として、入居前のWSの内容を独自に構築している。また、入居後も継続して定例会にオブザーバーとして参加し、発言者が偏らないよう、発言が少ない人には適宜話をふったり、「話し合い」が膠着状態に陥った時には第3者として提案を行ったりするなど、「話し合い」の有する自省性と平等性と協同性の維持に努めている。

こうした自主運営に基づいて生じてくるのが、居住者相互の信頼性である。これまで見てきたように、「話し合い」は互いに意見を出し合う一方、それを通じて相互理解を深めていく過程でもある。Amさんは「話し合い」を、「プライベートなことじゃなくって、ここで暮らす、暮らしのことについてのやりとり」を通じて「この人はこういう人なんだっていう安心ができる」ようになり「信頼関係を築いていく」場だと述べる。また役割や当番があえて他の居住者と協同で行われることで、居住者間のコミュニケーションが図られる。例えば、菜園の草ひきは「みんなで一緒に作業しながらおしゃべりしたり、近況報告」する機会である（2016/6/4）。この他にも、コモンミールやイベントなど、日常生活において居住者間がコミュニケーションを図れる機会は多々あり、こうした複層的なコミュニケーションを通じて互いに理解を深め、信頼関係が構築されていく。

自省性、平等性、協同性、信頼性という秋桜の社会関係的特徴を相互補完的に支えるのが空間的特徴である。特に重要なのがコモンをはじめとする共用空間の存在である。居住者の自主運営によって協同で維持される共用空間は、言い換えると居住者の「共有財」である。共有財としての共用空間は、日常生活において居住者間の近接性を高め相互作用を促すことに寄与する。と同時に、そこは自主運営を円滑に行う上で前提となる自省性、平等性、協同性、信頼性に基づいた相互作用が日常的に行われ再構造化される場でもある。つまり、コレクティブの社会関係的特徴にとって、この空間的特徴は不可欠の要因なのである。

そうすると、秋桜の社会関係的特徴と空間的特徴はどのように親たちの変化を可能にさせたのか。前節で見てきた親の変化は、制度的な教育のように、あらかじめその効果をねらった結果、生じてきたわけではない。むしろ、コモンをはじめとする共用空間を基軸とした近接性の高い居住のあり方がそうした変化を自発的に促してきた。この点において、秋桜の空間的特徴は重要な意味を持つ。ただし、近接性が高ければ親の社会化が起こるわけではない。その前提として、自主運営を基に築かれてきた自省性と平等性と協同性、さらにはそれらを通じて培われてきた信頼性という、居住者間の肯定的な社会関係が必要である。他者と育児の助け合いや相互参照を行うには、相手に対する信頼や対等な関係、さらには日常的な協同性があってこそ可能になるものである。また自身の価値規範や前提を相対化したり問い直したりするには、信頼性や平等性に加えて自省的な思考が働かなければならない。つまり、秋桜ではこうした社会関係的特

徴と空間的特徴があるからこそ、これまで見てきた親の変化が生じる可能性を生み出したと考えられる。この2つの特徴を通じた観点は、親の社会化の要件を見る上での一つの解釈枠組みとなり得るものである。

5．コレクティブ居住を通じた親の社会化論の課題と可能性

以上、本稿では秋桜を事例に、「親の社会化」という観点から、育児期の親の意識や態度が、コレクティブ居住における他者との日常的な関わりを通じてどのように変化するのか、さらにはその変化を可能とする要件について考察してきた。

冒頭での家族の社会化研究、及びコレクティブの先行研究に対して、本稿の意義は次の3点にまとめられる。第1に、本稿ではコレクティブに着目したことで、従来の核家族を前提とする社会化研究では射程に収められなかった「親」が、暮らしにおける他者との関わりを通じて社会化する様子を経験的に示すことができた。そこには様々なパターンが見られたが、いずれもコレクティブというミクロ社会の一員になる中で自己形成を図り、これまでのマクロ社会で身に付けた親としての価値規範から距離を置き直すという点で共通点が見られる。これこそが、コレクティブで観察された「親の社会化」の具体例である。第2に、本稿では、自省性と平等性と協同性と信頼性というコレクティブの集団特性を明らかにしたことで、親の社会化を可能とする要件も示すことができた。佐藤カツコは、パーソナリティ形成を主とする従来の社会化研究では、「個人がいかにして特定の社会の価値や態度や行動様式を身に付けるようになっていったのがわからない」（原文ママ）（佐藤 1976: 22）と指摘する。本稿はそうした課題を乗り越える1つの事例を提示できたと考える。さらに本稿は、コレクティブという住まい方と個人の意識や態度との関連を見てきたが、住まいと自己形成という点では、スウェーデンの住まいの歴史と文化を考察した太田美幸も「日常空間のあり方は、人間の自己形成に少なからぬ影響を与える」（太田 2018: 263）と興味深い指摘をしている。本稿もこの指摘と重なる部分が見られたが、特に本稿では日常空間のみならず、そこでの暮らし方を通じた集団形成のあり方もそこに暮らす人々の自己形成に影響を与えるものとして示すことができた。第3に、育児に関するコレクティブの先行研究では、効率性や合理性が親にとっての意義として強調されてきたが、本稿ではそれ以外の自省性、平等性、協同性、信頼性というコレクティブの諸特性を示し、それらと親の社会化との関連を示した点で、従来のコレクティブ居住に関する議論にはなかった新たな視座を提供できたと考える。

最後に、本稿が展開してきた、コレクティブ居住を通じた親の社会化論が持つ課題と可能性について述べておく。

秋桜で見てきた「親の社会化」は、同質性の高い集団の基で成立している予定調和的なものだと思われるかもしれない。なぜなら、秋桜では入居前に2年間にも及ぶWSで集団形成がある程度図られ、入居後も共通の言語で「話し合い」が行われているからである。つまり、秋桜に入居できない、または入居しない「他者」との共存をあらかじめ排除した上で成立している可能性があるのではないか、と。この点を考える上で、退去者の理由や居住者間のコンフリクトを考察することは一定の示唆を与えると思われるが、

本稿ではこの点ついて触れることができなかったため、稿を改めて論じたい。

ただし、秋桜には様々な他者に開かれた空間・関係への志向が認められる。例えば、秋桜ではコモンを近隣住民も参加できるコモンミールや育児サークルの場として開放する取り組みが積極的に行われている。これは、今後秋桜がより一層異質な価値や生活様式を持つ他者に開かれていく潜在的可能性を持っていることを示している。さらに牟田和恵が論じるように、コレクティブという住まいを活用し、ケアする／される関係に社会的な特権を付与する「ケアの絆による生活単位の構築」（牟田 2009: 81）が可能となれば、居住を通じてより多様な人間関係を取り結ぶことができるだろう。つまり、本稿で見てきた「親の社会化」のあり方も、今後、様々な他者との関わりを通じて多様な変化を遂げる可能性がある。その意味で、秋桜における「親の社会化」は必ずしも予定調和的なものではない。

こうした秋桜での他者にも開かれた、変化に富む自主運営が可能となるのは、秋桜では既存の秩序を維持し、それを居住者に適合させるのではなく、既存の秩序それ自体を変化させうる＜秩序＞が構築されているためである。つまり、自主運営のあり方もその都度「話し合い」の中で自省的に捉え直し、組み替えることが可能なのである。このように、現代の日本で展開されているコレクティブの一つである秋桜では、現状のルールや仕組みを「話し合い」などの相互作用を通じて絶えず自省的に作り変えるという柔軟な秩序形成のあり方が認められる。

コレクティブは、異質な価値や生活様式を持つ他者同士が、相互にその差異を認識し合い、個別の価値観や暮らし方を尊重した上で互いに共存できる方法を模索していく暮らし方である。それは、都市空間の広場や交通機関で様々な他者が居合わせる一時的な「共在」とは異なる。つまり、コレクティブ居住は、異質な他者同士が互いに持続的に共存できる社会秩序のあり方を考えていく上で一定の社会学的意義を有しているのである。こうした観点からさらにコレクティブ研究を深めることが、今後の課題である。

謝辞

調査実施にあたっては、秋桜の居住者の皆様及びCHCのスタッフをはじめ、ご協力頂いたすべての方々にこの場を借りて心より御礼申し上げます。

付記

本稿は、JSPS科研費（課題番号: 16J40007）による研究成果である。また、住友生命保険の「第8回未来を強くする子育てプロジェクト」による助成の研究成果の一部である。

参考文献

[1] 小谷部育子編著 , 2004,『コレクティブハウジングで暮らそう――成熟社会のライフスタイルと住まいの選択』丸善株式会社.

[2] 工藤保則 , 2016,「生活の一部としての＜オトコの育児＞」工藤保則・西川知亨・山田容編『＜オトコ＞の育児の社会学――家族をめぐる喜びととまどい』ミネルヴァ書房 , 1-14.

[3] 牧野カツコ , 1982,「乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要』3 : 35-36.
[4] 松原治郎 , 1981,『核家族時代』NHK ブックス .
[5] 森岡清美・塩原勉・本間康平編 , 1993,『新社会学辞典』有斐閣 .
[6] 牟田和恵 , 2009,「ジェンダー家族のポリティクス――家族と性愛の『男女平等』主義を問う」牟田和恵編『家族を越える社会学――新たな生の基盤を求めて』新曜社 , 67-89.
[7] 中谷奈津子 , 2008,「子どもから離れる時間と母親の育児不安――専業母に“自分の時間”は必要ないのか？」大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編『男の育児・女の育児――家族社会学からのアプローチ』昭和堂 , 45-67.
[8] 落合恵美子 , 2004,『21 世紀家族へ〔第 3 版〕――家族の戦後体制の見かた・超えかた』ゆうひかく選書 .
[9] 太田美幸 , 2018,『スウェーデン・デザインと福祉国家――住まいと人づくりの文化史』新評論 .
[10] Parsons, Talcott, 1951, *The Social System*, Routledge and Kegan Paul.（佐藤勉訳 , 1974,『社会体系論』青木書店 .）
[11] Parsons, Talcott and Robert F. Bales, 1956, *Family: Socialization and Interaction Process*, Routledge and Kegan Paul.（橋爪貞雄・溝口謙三・髙木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳 , 2006,『家族――核家族と子どもの社会化』黎明書房 .）
[12] 櫻井典子・小谷部育子・大橋寿美子・岡崎愛子 , 2012,「コレクティブハウジングの子育ち・子育て環境としての価値の研究（その 1）: スウェーデンと日本のコレクティブハウス事例にみる子育ち・子育て環境」『日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科』16 : 145-156.
[13] 佐藤カツコ , 1970,「家族における子どもの社会化に関する一考察――ベールズの相互作用分析による親子関係の分析」『教育社会学研究』25 : 146-160.
[14] 佐藤カツコ , 1976,「親子関係と子どもの社会化」『教育社会学研究』31 : 17-28.
[15] Vestbro, Dick Urban, 2008, “From Central Kitchen to Community Co-operation: Development of Collective Housing in Sweden,” *Open House International*, 17(2): 30-38.
[16] 山根真理・松田智子・斧出節子・関井友子 , 1990,「保育園児をもつ母親の育児問題―育児不安を中心にして―」『総合福祉社会研究』2 : 110-121.

資料

[1] NPO 法人コレクティブハウジング社 , 2007a,『つくろうワークショップ』.
[2] NPO 法人コレクティブハウジング社 , 2007b,『豊かな暮らしづくりワークショップ』.
[3] NPO 法人コレクティブハウジング社 , 2008a,『暮らしの運営ワークショップ 1』.
[4] NPO 法人コレクティブハウジング社 , 2008b,『豊かな暮らしづくりワークショップ 2』.

注

1）育児不安とは、「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」（牧野 1982: 34）を意味する。
2）「秋桜」という名称は倫理的な面を配慮し仮名である。調査実施にあたっては、調査開始時に筆者が所属していた大阪大学大学院人間科学研究科の調査倫理委員会から承認を得た後、秋桜の居住者組合及びインタビュー対象者から調査同意を得た。
3）CHC は 2000 年 10 月、スウェーデンにルーツを持つコレクティブの普及活動・事業化・運営支援を目的に設立された（https://chc.or.jp/outline.html、アクセス日 2019 年 8 月 20 日）。
4）シェア住戸の場合、台所・浴室・トイレは 2 戸で共用。
5）CHC スタッフから文書での回答（2017 年 12 月 17 日）。
6）大人は入居時に居住者組合への加入が原則である。子どもは 18 歳の時点で組合に加入するかどうかを本人が選択

する。また組合費として、入居時に出資金（大人 1 人につき 25 万円）を拠出するほか（退去時返却）、家賃とは別に毎月組合費（金額は年度によって異なるが、2019 年度は、大人単身世帯の場合 1 人あたり 8,700 円、大人 2 人以上の世帯の場合、2 人で 14,600 円、子どもは 1 人につき 500 円）の支払いがある。組合費は役員・運営委員や活動グループの費用、共用空間の備品購入費・光熱費などにあてられる。

7）2019 年度は、役員（代表、副代表、会計監査、書記）、運営委員（会計係、会員係、見学対応係、CHC 対応・広報係、地域対応係、大家対応係）、活動グループ（コモンミール、みどり屋上、みどり地上庭、美化ランドリー、メンテナンス、イベント、ワークショップ、キッズ、ペット、コモンスペース、憲章）で構成される。居住者は毎年度、1 つの役員・運営委員と 2 つの活動グループへの参加が求められる。

Socialization of Parents and Living Conditions in Collective Housing: A Case Study of Collective House Kosumosu

Naoko INAMI

Abstract:

How do people form themselves in society? As a means to address this question, sociology developed the concept of socialization, and the family has been regarded as a significant institution in this regard. However, previous research based on the nuclear family has overlooked the possibility that parents may be socialized by others through childcare. This article examines how parents change their consciousness and behaviors when living in collective housing and considers the "socialization of parents" and how prevalent conditions influence them. In doing so, it reports on the results of a case study of Collective House Kosumosu (hereinafter, Kosumosu) based on data collected during observation and one-on-one interviews with three sets of parents.

The study identified four patterns of "the socialization of parents" in Kosumosu: (1) liberation from social norms of childcare and motherhood; (2) relativization and mutual comparison of childcare; (3) acceptance of the imperfectness of parents; and (4) reflexivity of the parental role. Moreover, "the socialization of parents" in Kosumosu becomes possible through the mutual complementarity of the living space (living close to each other in common spaces) and positive social relationships based on reflexivity, equality, cooperation, and trust constructed by self-management.

Collective housing presents a unique contemporary style of coexistence in which people with distinct values and lifestyles find a way of living together while recognizing and respecting their differences.

Key Words : Socialization, Parents, Collective housing, Self-management, Common spaces